

新・農業経営者ルポ／第131回

自然のままにボタンを育てる 「花職人」



自然のままにボタンを育てる「花職人」

茨城県つくば市に、全国から大勢の人たちがボタンやシャクヤクの観賞に訪れる植物園がある。農業生産法人の株式会社荃崎観光農園が運営する「つくば牡丹園」だ。決して交通の便がいいわけではないのに、人々はなぜこの植物園に魅せられ、やってくるのだろうか。自称「花職人」という園主の関浩一を訪ねた。

文・写真／窪田新之助

自然を活かした植物園

新緑の季節を迎えたつくば市では、前日からの青空がこの日も広がっていた。開けた田園のなかに、ぼつんと鎮座するこんもりとした森は、まんべんなく太陽の光を浴び、どこかうれしそうだ。そこに向かつて歩いて近づいている間にも、時折気持ちのいい春風が吹き抜け、そのたびに木々は喜ぶようにざわめく。生き生きとして映る森のそばにたどり着き、その脇の道をかすめるように通り過ぎると、趣のある木造の門構えが見えてきた。どうやら目指していたつくば牡丹園に到着したようだ。

門前には駐車場がある。平日の昼間であるものの、すでに結構な台数の乗用車やバスが停まっている。受付の女性によれば、今年は4日前に開園したばかりだという。

春の開園期間は4月中旬から5月下旬と短い。それでも、全国にいるリピーターを中心に毎年この時期を覚えていて、大勢の人たちが訪ねて

くる。園主の関によれば、過去には10万人の来場者を迎え入れたこともあったというから驚いてしまった。ちよつとした遊園地の入場者数よりもはるかに多い数字ではないか。そのころは駐車場に車が入り切らず、辺りに大渋滞を引き起こしてしまっただ。開園しているのはまさに田植えの時期である。関はそのころを振り返りながら、「田植機の通行を妨げて、近隣の農家にご迷惑をかけてしまった」と苦笑した。

筆者がここを訪れたのは今回が初めてだが、それでも入園してみたら、多くの人を引き寄せる理由がすぐにはわかった気がした。

ここは、ほかの植物園とは明らかに違う。たいていの植物園は人工的である。周囲の空間とは切り離されて存在し、入園する際には多少なりとも「さあ入るぞ」といった心構えが要求される。園内の道はコンクリートで敷き詰められ、辺りに漂うのは花の香りばかりである。また、咲いている花々は時として自己主張が強すぎ、まるで「どうだ」といわ

んばかりである。もちろん、花を観賞するためだけに来園したのであれば、それはそれでいいのだろう。

一方のつくば牡丹園は飾り気がない。門をくぐると、ここまで歩いてきたのと同じ土の道が続いている。園内ではほかの草木に混じって花々が咲き、奥には行き道で目にしたと思われる森が見える。花の香りに混ざって土の香りがし、自然のさまざまな色彩のなかに花の色もある。ここは周囲の風景と切り離されているのではなく、そこに溶け込むようにして存在している。そうした自然のなかに、花もまた自然に存在している。花とともに、この土地ならではの空間を楽しむようにできているのだ。

もちろん、自然のように見えて、自然に放っているわけではない。そうした雰囲気を作りだすのに、関は園内の管理に多大な労力を払っている。それを見せないところが園主の力量である。そうした第一印象を抱いたうえで、関に改めてインタビューしてみると、やはりできる限り自然のまま残すことを大切にしているのだという。

「あちこちの牡丹園や植物園に行っただけど、どこも公園のように感じた。人工的に造成して、ぱっぱと植えてある。うちも以前は砂利を敷い



つくば牡丹園 代表

関浩一

茨城県筑西市

せき・ひろいち 1960年7月、茨城県明野町（現・筑西市）生まれ。都内の私立大学法学部を卒業後、叔父が経営する不動産会社や霊園で事務職や営業職に携わる。98年に脱サラし、つくば牡丹園を開園。現在は園主としての仕事の傍ら、茨城大学大学院に在学している。

て、人工的にしていたんですよ。でも、いまはなるべく自然のままにしている。こういう牡丹園って珍しいんだよね。自然のなかに花を咲かせていることがみんなに好まれているんじゃないかな」

そんな園内を、関に案内してもらって一通り巡ってみた。6 haという広大な敷地には550種類のボタンと215種類のシャクヤクのほか、ツツジやサツキ、アジサイなども植栽している。自然を大切にしているとあって、雑草は可能な限り残しており、もともとこの土地に生えていた木もなるべくそのままにしてある。関は、「ここは人間が中心ではなくて、自然が中心なんです」と語る。

それにしても6 haという広さなので、ただ歩いて回るだけでも往復で30分はかかる。おまけに地形にしても自然のまま残そうとしているため、園内は高低差があつて、途中で上ったり下ったりしなければならぬ。来場者は年配の人が多くというが、最後には疲れてしまふだろう。そんなこともあって、休息できる場所として、途中にレストランや茶屋を用意している。

それから園内の道は幅を広く取つてある。どんなに狭くても2 m半はあるだろうか。だから、この植物園

はカメラマンに人気だそうだ。三脚が立てられるからである。こうした心遣いがうれしい。

ボタンへの愛「目覚める」

じつはこの植物園を最初につくつたのは関ではない。彼の叔父である。叔父は植物園のすぐ隣で、いまでも続いている公園墓地「筑波茎崎霊園」を経営してきた。その隣接地に植物園を開園することに決めたのは、墓参りに訪れる人たちに、せつかく来たついでに、安息の時間を過ごしてもらおうという気持ちからだつた。

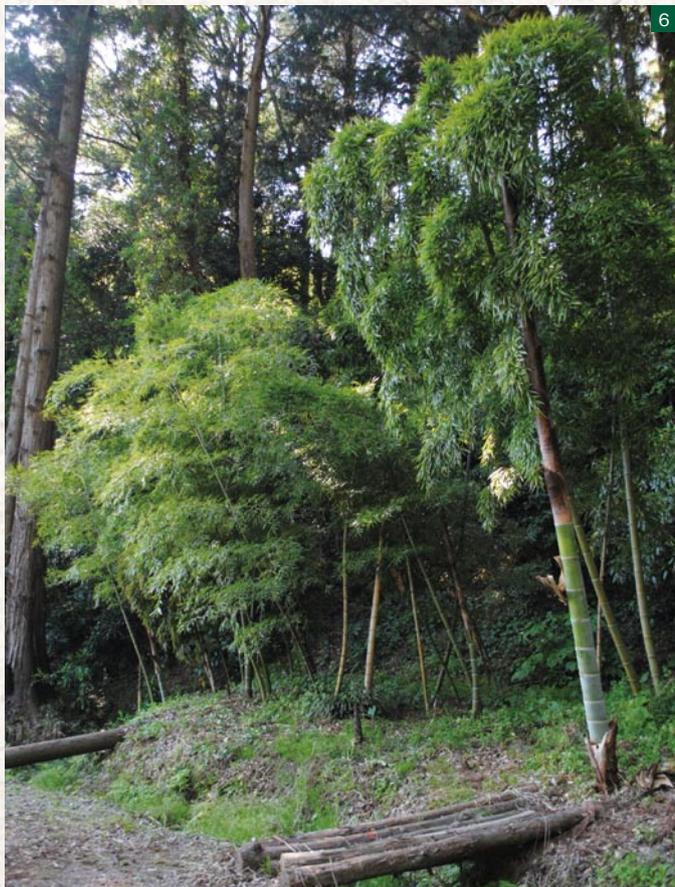
叔父が数ある植物のなかからボタンを選んだのは、知人の日本画家たちの要望である。日本画家にとつてみれば、日本画にとつて欠かせないボタンを描くのに、絵筆を握つてゆっくり過ごせる場所がなかったのだ。

この植物園が開園したときに、その運営を関がすぐに引き受けたのかといえ、そんなことはない。じつのところ、関自身は花を愛でる趣味は持ち合わせていなかった。小学校の道徳の授業では花壇の清掃が義務だったが、「大嫌いだつた」という。学生時代に打ち込んだきたのは、ほかの多くの男子と同じようにスポーツ。とりわけ、短距離走や走り幅跳びに熱中し、周囲に右に出る者



1~4 見ごろを迎えたボタンの花々。「初蕾」「トリビュート」などオリジナル品種もある。

自然のままにボタンを育てる「花職人」



6



5



7

5 日本庭園のようにした場所。
6 7 竹林やソテツなど、花以外の脇役も訪れる人々を楽しませる。

はいないというほどの実力を持っていた。スポーツは万能で、一つのことにとことん熱中しやすいタイプ。そうした遺伝の由来を尋ねると、それは母親にあるのだそうである。母親はバレーボールの名選手だったから、その血を継いだのだろうかという。都内の私立大学を卒業すると、叔父が経営している不動産会社に入社した。ただ、不動産の仕事は性に合わず、しばらくして「筑波茎崎霊園」の仕事に移った。ここで仏教に打ち込む。関は、「著名な先生のかばん持ちを3年したぐらいですから、仏教についてはいまでも語れますよ。一時は仏教に関する本を書こうと思っていたほどです」と語る。以上のような経歴を見てみると、関は一つのことに打ち込む性質を持っているようだ。

では、それほどに打ち込んでいた霊園での仕事を捨て、なぜ花に気持ちが向かうことになったのか。そうなった日のことを、関はいまでもはっきりと覚えている。1989(平成元年)の4月25日。これは叔父が植物園を開園した日である。関は開園と同時に誰よりも早く入園した。そのとき、目の前にあったのは「芳紀」という名前のボタン。それを見た瞬間、関はその花にほれてしまったのだ。それは恋愛のようだった

たという。「その花がものすごくきれいに見えたんです。ああ、これがボタンなのかと」

それからは植物園に毎日通うようになった。そしてわずか2週間で、当時咲いていた80種類のボタンの名前をすべて覚えてしまった。それほど熱中してしまったのだ。関は、「好きな人の名前は忘れないですよ。それと一緒に笑う。」

ただ、この体験だけではサラリーマンから農業経営者に転身することにはなかつたかもしれない。より決定的だったできごとは、それから2年後に起こる。この年、愛してやまない園内のボタンが次々に枯れていったのだ。

「絶対枯らさないようにするにはどうするか。それが僕の仕事になった。そのために土壌学に入ってしまった」

土壌学を勉強するなかで、関は「先生」と呼ぶ人たちに会うようになる。「化成肥料の神様」と呼ばれる人から「在野の一風変わった微生物の研究者」まで。本誌にたびたび登場する茨城県牛久市の高松求も師事した一人である。

そうした先生に教えを請うなかで、関は最終的にオリジナル堆肥「土壌革命」を開発する。関によれば、この堆肥は麦を培地に、みそやしよ

うゆを作るような工程で発酵させたもの。

ポイントは微生物だけでなく酵素も混ぜていることだ。微生物は枯れ葉や枯れ枝などを分解する際、酵素の働きを借りる。ただ、あらかじめ酵素を混ぜておけば、それだけの相乗効果で腐食は急速に進む。関によれば、自然界の働きだけに委ねているだけでは、落ち葉や枯れ木が腐食するまでには2〜3年はかかる。これでは花を育てることはおぼつかない。それが土壤革命を使えば、わずか42日間で腐食がつけられるようになる。

加えて、関は微生物の働きを促すため、落ち葉や枯れ枝の上に米ぬかをまいている。これに関して関は次のように説明する。

「あまり知られていないことですけど、微生物の働きにリンは欠かせない。この辺りは関東ローム層で赤土なので、固定したリンが豊富にある。それを分解して、微生物が生息できるようにになっている。ただし、そのリンを食い尽くせば微生物は動けなくなる。せいぜい2年が限度。だから、米ぬかでリンを補給してあげる必要がある」

そうやってボタンの栽培に打ち込むうちに、いつしか本業と副業は入れ替わっていた。土壤革命が完成す



るより前の98年、関は意を決する。叔父から植物園を買い取って、「つくば牡丹園」の園主となった。

関は、取材に応じるなかでこれまでの人生を振り返りながら、母親の血を受け継いでいたことを実感したようだ。スポーツに打ち込んだのもそうだし、農業を始めたのもそうだ。母親は農業をしていて、関は子どものころに嫌々ながら手伝わされた思い出があるという。それでも農業を仕事にしたのは、戻るところに戻ってきた感じがしているようだ。関は、「ちゃんと書いておいてくださいよ、とんびの子はとんびだったってね」と言ってきた。

「受け身」から「攻め」に転じる 薬用シヤクヤクの販売

脱サラして植物園の園主となってから、年収はサラリーマン時代の3分の1になった。それでも来園者は多く、経営の先行きを楽観していたようだ。



8〜11園内の各場所は、それぞれが区切られて一つの景観として完成した空間となっている。

自然のままにボタンを育てる「花職人」



14

12園内にある茶屋。
13茶屋では農産物を販売している。
14レストランの一角にある直売コーナー。
「牡丹染め」の民芸品などを売っている。



12



13

だが、10年も経たないうちに危機が訪れる。2008年のリーマンショックだ。これ以来園者が急激に減った。さらに、11年には東日本大震災による原発事故が起き、客足の低迷に拍車をかけた。その影響はいまに至るまで残っており、先行きは不透明だ。

だから関は、「受け身の姿勢から攻めの姿勢に変わらなければいけない」と覚悟している。「受け身」というのは、来園者を待つだけの経営ということ。窮状を打開するには、それに代わって新しいことをしなければならぬ。そこで取りかかっているのが、薬用シヤクヤクの生産とオリジナル堆肥の販売である。

ボタン科のシヤクヤクは漢方の原料となる。その効能は冷え性や神経痛、慢性胃腸炎の緩和など多岐にわたる。日本の生薬の自給率は1割程度に過ぎない。原料の調達では大半を中国に頼ってきたが、中国政府は自国での需要増から輸出を制限するようになってきている。このため、日本政府は国内生産の拡大を図っているところだ。

こうした時流に乗って、関も仲間
の農業法人や農家とともに、薬用
シヤクヤクの生産を始めた。販売先
は国内大手の漢方薬品メーカーを予
定している。

このメーカーは根だけを希望している。収穫できるようにするまでには、株分けの場合は5〜6年かかる。収入は年平均にして、10a当たり約20万円を見込んでいる。ただし、根だけでなく、茎葉にも薬用成分が豊富に含まれている。そこで、関はそれらを茶葉などに加工して、独自に販売することも検討中だ。無農薬で栽培しているため、残留農薬の心配はない。茎葉は株分けの場合には2年目から収穫でき、年間の収入は根とほぼ同額になる見込みだ。

関は11月から12月にかけてシヤクヤクを収穫したところ、薬用成分の含有率は最大で11・7%もあった。ただし、予定している取引先の漢方薬品メーカーは、薬用成分の含有率によって取引単価を変えることはない。8月から9月に掘り出せば、薬事法の基準である2%はクリアできる。だから農家にとってみれば、管理の手間をかけないよう、8月から9月に掘り出すことになる。ただし、それではもったいない。そこで関は、薬用成分の含有率に応じて取引単価を上げてもらうよう価格交渉を進める。

関は「ほかにも作ってくれる農家を集めて、産地化を進めていきたいと思っています」と話している。

(文中敬称略)